

所沢市中心市街地の文化財活用についての研究



K99007 市川 真光

1 研究背景

1-1 所沢市について

所沢市は江戸期に、南北の「鎌倉街道」と東西の「江戸道」が交差する要所として整備された。鎌倉街道沿いの民家は次第に江戸道沿いに移り、街道町が形成され「三八市」など、地域経済の中心として発展を遂げた。

特に、江戸後期から明治期にかけては、「所沢飛白」とよばれる綿織物の一大集産地としてにぎわい、明治30年代には全盛期を迎え、中心市街地である「銀座通り」には、数多くの蔵造の商家が競いあうように軒を連ねた。

また、この時期には、明治28年に鉄道が敷設され、明治44年には日本初の飛行場が開設された。しかし、「銀座通り」のにぎわいも大正期に入ると徐々に下降し、昭和初期の大恐慌を境に大きく衰退の道を辿っていった。

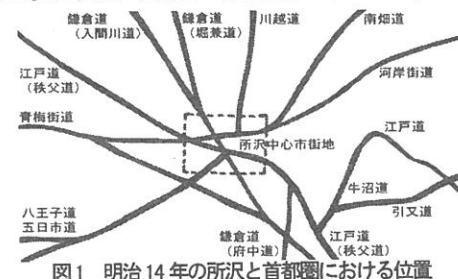


図1 明治14年の所沢と首都圏における位置

1-2 中心市街地に残る歴史的建造物の現状

かつての織物のまちは、今では東京のベッドタウンとして、埼玉県西部の中心都市として発展しているが、旧町地区はかつての活気が戻らないままとなっている。

通りに面する立派な蔵造りの店は孤立し、看板やアーケードでその姿を隠し、地元住民もその存在価値に気付かないのが現状である。そのような中、「所沢市中心市街地再開発事業」により、突如出現したのが無計画ともいえる高層マンション群である。30階を超えるものが既に4棟建っており、今後も更に増加する傾向にある。それを示したのが右上の図2で、黒い部分が土蔵造りの建物、太線で囲った部分が既存の高層マンション、そして斜線部分が現在建設予定の過程にある高層マンションである。

2002年以降高層化の勢いは加速し、「銀座通り」では相次いで伝統的商家が取り壊されている。その中で、市史跡指定を受けている「斉藤家」が、取り残されることになった。

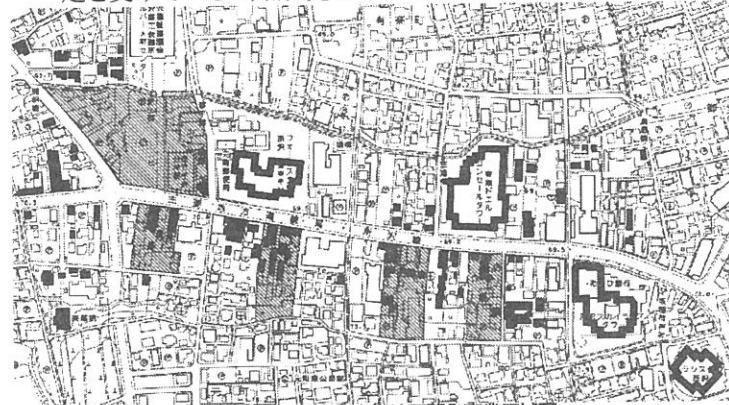


図2 所沢市中心市街地再開発事業区域図

2 研究目的

本研究では、所沢の町並における歴史的建造物の平面的な連続性を把握・記録保存し、その中心的存在に位置する「斉藤家」の今後の保存・活用に向けて、有効な方向性を探求することを目的とする。

3 研究方法

- 実測調査のデータ、当時の航空写真、市教育委員会による調査報告書を元に、中心市街地の連続平面図を作成する。歴史の変遷を考慮に入れて、平面構成の把握および特徴の分析を行う。
- 中心市街地で唯一、市史跡指定を受けている斉藤家について、実測調査・聞き取り調査ならびに史資料・先行研究を参考に研究する。

4 研究内容

4-1 これまでの調査について

市教育委員会の調査委託を受けた伝統技法研究会によって行われた実測調査に、下記の日程で参加した。

- 10月17日 所沢町並概観調査
- 10月28日 いづみや糸店、主屋・土蔵実測調査
- 11月5日 さがの苑、見世蔵・主屋・土蔵実測調査
- 11月19日 斉藤家、見世蔵・主屋・土蔵実測調査

4-2 調査対象建築物について

表1 調査対象建築物一覧表

		建築年代	根拠	概要
いづみや糸店	主屋	明治29年頃	聞き取り	切妻・2階建
	土蔵	明治29年	地棟の墨書	切妻・妻入2階建
さがの苑	見世蔵	大正4年	聞き取り	切妻・平入2階建
	主屋	大正4年	聞き取り	寄棟・平家
	土蔵	明治～大正	聞き取り	切妻・平入2階建
斉藤家	見世蔵	江戸末期	武州一揆の刀傷(1866年)	切妻・平入2階建
	主屋	江戸末期	聞き取り	寄棟・平家
	土蔵	明治時代	聞き取り	切妻・妻入2階建

4-3 いづみや糸店について

いづみや糸店は綿糸商として、明治7～8年頃に商売を始めた。主屋の東側には1間幅の通り土間があり、以前はその東側に板敷きの勝手があった。12畳の和室が2部屋南北に続き、東と南に縁が廻っており、その縁の床板には長さが2.5間～3間の1枚板の樺材が使われている。

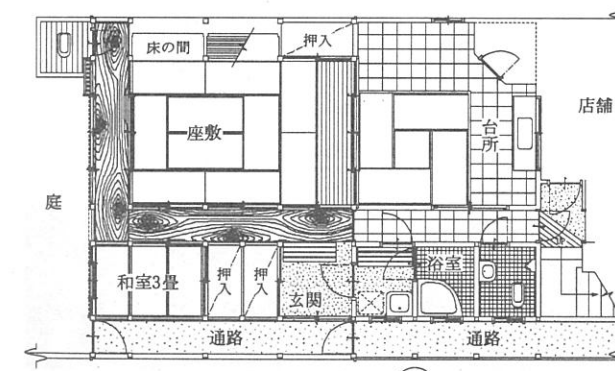


図3 いづみや糸店・主屋1階平面図

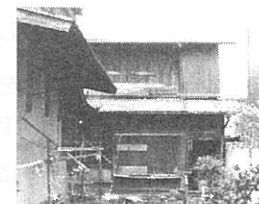


写真1 いづみや糸店・主屋



写真2 いづみや糸店・土蔵

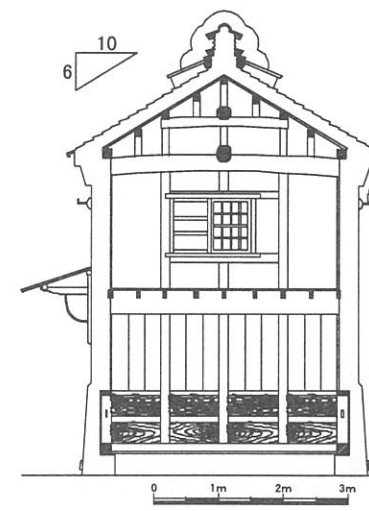


図4 いづみや糸店・土蔵断面図

4-4 さがの苑について

呉服店を始めたのは明治時代と伝えられているが、それ以前は、「銀座通り」の別の場所で小間物商をしていたとされる。見世蔵の腰巻き部分は、丁寧に加工された石が張られている。出桁を漆喰で塗り込め、3重蛇腹を廻している土蔵造りの建物で、屋根の棟が高いのも特徴的である。

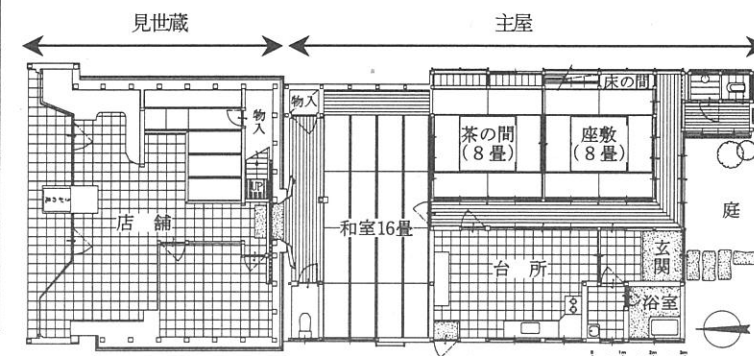


図5 さがの苑・主屋、見世蔵1階平面図



図6 さがの苑・主屋、見世蔵西側立面図



写真3 さがの苑・ファサード



図7 さがの苑・南側立面図

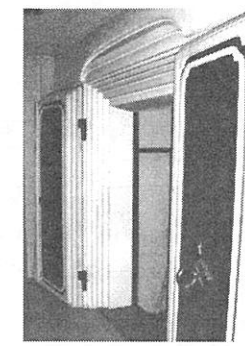


写真4 さがの苑・観音扉



写真5 さがの苑・小屋組

4-5 連続平面からの分析

本研究による実測結果と先行報告書より、「銀座通り」の南北各街区における連続平面図を作成し、図8に示す。建物配列は一般的に、道路正面に見世蔵が建ち、その裏側に主屋が接しており、庭を挟んで土蔵が建っている。土蔵は棟を銀座通りと直角に向けて建てられており、主屋の裏側に数棟並ぶものもある。

敷地は間口に対し奥行きが深い短冊形となっている。銀座通りの北側では敷地の裏側に東川が流れており、敷地の奥行きが約70~90mで限られている。一方南側は、道路から70~80m程奥に河岸段丘の崖地が連なっているため、その範囲までが敷地となっているものがほとんどである。

敷地の道路に対する建物の間口は、一般的に5間であるが、かなり広い範囲を占める敷地も見られる。このことから、明治初期には既に有力な商人による土地の専有化が起こっており、一部の商家が繁栄していた事が分かる。

現在では町割の細分化が進み、「銀座通り」に面している敷地と裏の敷地が分かれていたり、枝道に面した敷地などは更に細かく分割されている。

地割の特徴として、「銀座通り」を挟んで北側と南側の地割の方向が異なる事が挙げられる。南側の敷地が「銀座通り」に直交しているのに対し、北側の敷地は少し北西に振られているため、敷地の東に台形状の空間が生じている。

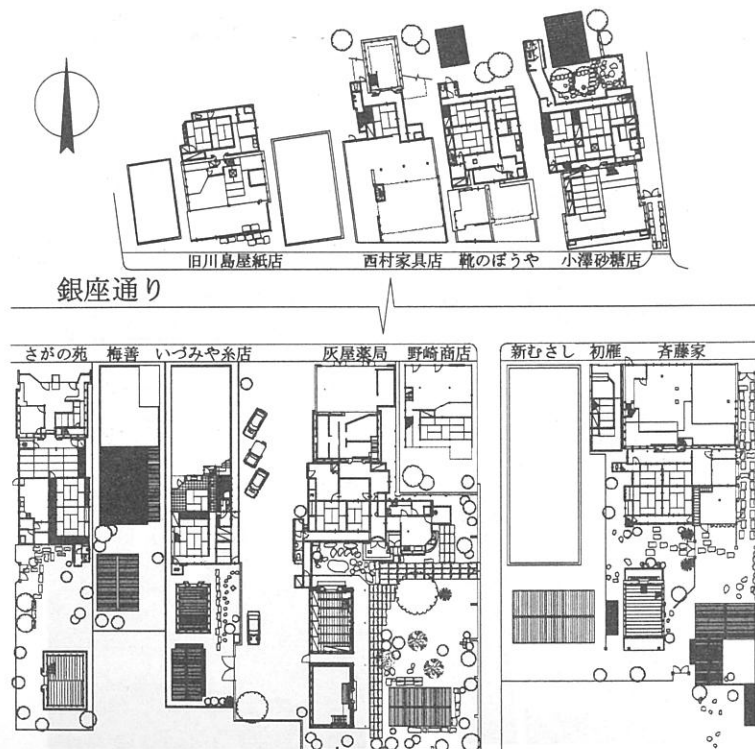


図8 「銀座通り」周辺1階連続平面図

4-6 齊藤家について

齊藤家は所沢の草分け的な町家である。戦国時代に所沢に定住するようになったと伝えられており、江戸時代には薪炭を扱う肥料商を営み、のちに米穀も扱った。名主も勤めており、所沢村の有力商人に数えられていた。

慶応2年(1866)の武州世直し一揆の際には、打毀しの被害を受け、現在も主屋の大黒柱に当時の刀痕が残っている。このため主屋は江戸後期から幕末期の建築と推定される。家の造りは見世蔵に主屋が接続した造りとなっており、見世蔵も江戸時代の建築とされている。

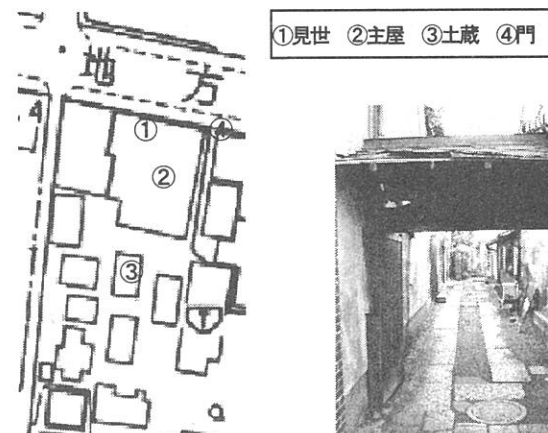


図9 齊藤家周辺図

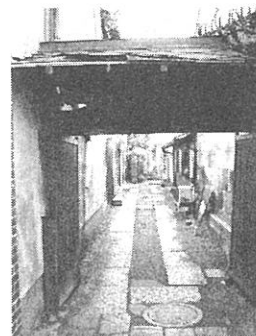


写真6 齊藤家・門

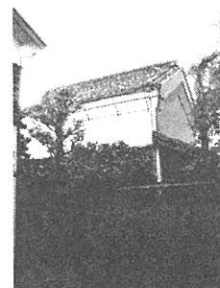


写真7 齊藤家・土蔵

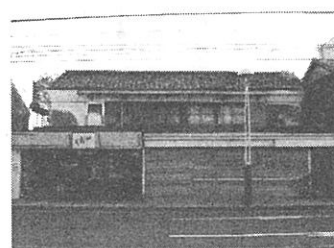


写真8 齊藤家・見世

齊藤家は、明治16年(1883)明治天皇の飯能行幸に際して行在所となり、この際にかなり改造されている。表門を新築したのをはじめ、障子・襖・畳は新調、庭も植木を手入れし砂を入れ門踏石も新しくした。齊藤家の見世は、「銀座通り」に面して北側に間口を広げている。主屋へは見世から通じているが、家の人は普段、見世の東側の表門から裏へまわり、中門をくぐって主屋へ入っている。

同家はその後も事ある度に、しばしば公人の宿舎とされ、所沢においてその評価価値を高めていった。戦後、昭和40年代まで住居として使用され、昭和44年に市の史跡に指定された。

齊藤家は現在、「銀座通り」に面した北側半分が商店や事務所として使われているだけであるが、建物はそのまま、裏庭から見える景観は当時のたたずまいを偲ばせてくれる。

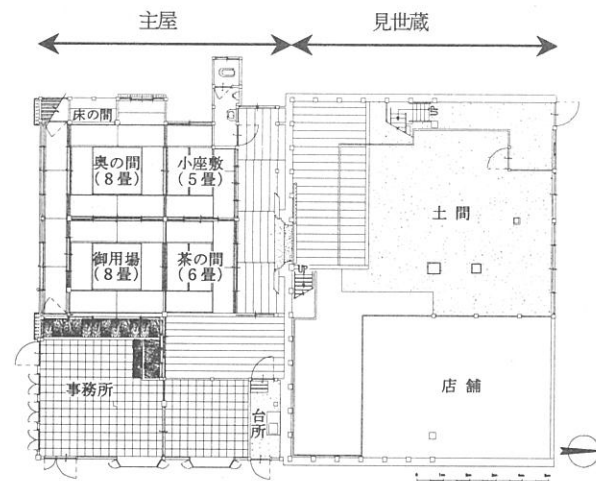


図10 齊藤家主屋・見世蔵1階平面図

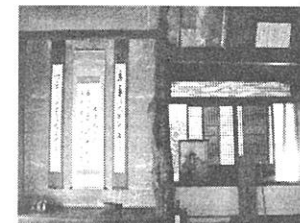


写真9 齊藤家・明治天皇行在所

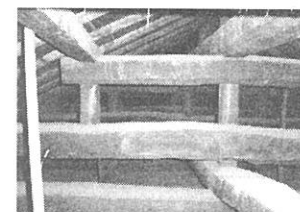


写真10 齊藤家・見世蔵小屋組

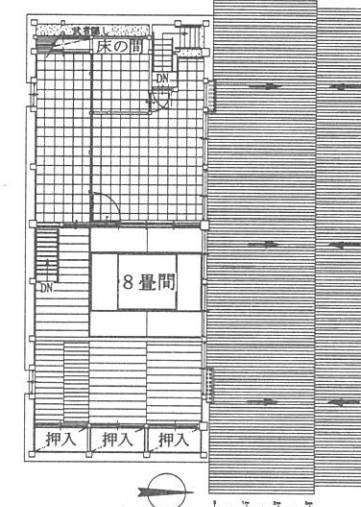


図11 齊藤家見世蔵2階平面図

5 所沢市中心市街地の活性化に向けた提案

所沢に必要な活性化の要素を、当研究室による昨年度の成果を踏まえ、齊藤家を中心として以下の提案を行う。

都市構造面からの提案

・「銀座通り」の見直し

「銀座通り」に面している建物のほとんどが、通り側のスペースが少ない上に、営業車両のスペースを全く考慮していない設計の為、必要以上に路上駐車が増え、渋滞を更に拡大させている。また、幹線道路が細くかつ逃げ道がなく、西武線の踏み切りもネックとなっている。「銀座通り」北側では、東川のプロムナード整備という結実に至った。一方の南側では、崖上に「銀座通り」側を見下ろせる道と、それに通じる道を整備する必要がある。これにより、人の流れが大きく変わると考えられる。

ソフト面からの提案

・新、旧の住民参加による組織作り

所沢に住む多くの人が、自分達の街が歴史的な街であることを認識していないのが現状である。現在所沢には、従来からの居住者、新しく建てられたマンションの居住者がおり、更には今後の再開発により入居する人が加わる。現在この三方間の間では、歴史的建物の保存運動や高層建築による日照権の問題があり、大きな隔たりが生じている。この隔たりを緩和する為にも、街のことをより良く知るための場を設ける必要がある。現在、市民団体として「所沢たてもの応援団」(平成9年開始)、「ところざわ歴史の未来まちづくり研究会」(同平成13年)、「所沢を活かす会」(同平成13年)が活動している。各団体は精力的に町並見学会や講演会を実施しているが、団体間同士では統率されていない現状にある。今後は各団体が連携・統合し、新旧の住民が一体となり、より大きい積極的な組織作りが望まれる。

ハード面からの提案

・齊藤家の活用案

「銀座通り」の中央部に建ち、歴史的価値からも中心的存在である齊藤家を、街のことを知ってもらうための資料館として活用することを提案する。今後有形文化財になった場合を考慮し、外観は変えず主に蔵の内部を改修する。この資料館の最大の目的は、まず地元住民に所沢が歴史的な街であることを認知させる事である。更にはその人達が、今後入居してくる人達に、その存在を教えることで、新旧の人達の間で交流が生まれてくることを目的とする。資料館のあり方としては、一方的に物を展示するのではなく、地元住民による伝統技法の実演や公演を開催する。また敷地内に学習施設を隣接させ、周囲の学校と連携し、若い世代にも伝えていく事を提案する。

参考文献

- 1・所沢市教育委員会『所沢市中心市街地歴史的建造物調査中間報告書』平成12年
- 2・所沢市教育委員会『所沢たてもの帖◆所沢市中心市街地歴史的建造物調査◆』平成14年
- 3・伝統技法研究会『所沢の土蔵における技法』平成11年
- 4・所沢市中心市街地街並み整備計画策定委員会『所沢市中心市街地街並み整備計画書』平成7年
- 5・『所沢市史・上、下、文化財』

指導教員名 伊藤 洋子教授